

専攻医
の主張

皮膚科3年目を迎えて

JR広島病院 皮膚科 住元 遥香

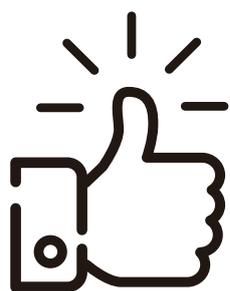
すっかり秋めいて暑さが和らいできた今日この頃、皮膚科としては、夏場の忙しさが一段落落ち着いてくる季節にほっと胸をなでおろす時期になりました。私は専攻医として3年目を迎え、季節の移ろいと共にさまざまな症例に出会い、日々成長を感じている中、このコーナーの原稿執筆の依頼を受け、筆を執らせていただきました。

なぜ夏場が忙しいかというと、アトピー性皮膚炎などは汗により増悪しがちで、蕁麻疹も暑さによりかゆみが増悪しがちです。また虫刺されも増える季節で、皮膚科医にとって夏は忙しい季節といえるからです。

私が研修医の頃、皮膚科という科を専攻しようと思った理由は、身もふたもないことを言えば単純に母がそうだったから、と言わざるを得ないのは今でも変わりませんが、しかしそれだけではない面白さも感じていたと思います。それは例えば、皮膚科は目に見える症状を患者と共有できるということです。血液検査や血糖の値も患者と共有できるものではありませんが、それにもまして「自分の肌が日に日にきれいになっていく」という喜びを患者さんと共有できたときは、皮膚科冥利に尽きるものがあります。そのためには、普段から患者さんに正しい処置の仕方を指導する必要があります。例えば、皮膚に傷があったとき、お年寄りがよくする「消毒」ですが、これは皮膚科としてはまずおすすしめしません。消毒は線維芽細胞など創傷治

癒のための細胞も殺してしまうため、創傷遅延の原因となる、とされています。感染がひどくない傷などであれば、1日1回泡せっけん（もしくはせっけんを泡立てて）で洗い、あとは軟膏をつけたガーゼなどで保護する、これだけで十分なのです。

思えば、私が現在の勤務先に来てから1年半あまりがたちましたが、いろんなことがありました。コロナウイルスがまん延し始めたころは、「どうせ皮膚科はマイナー科だからそんなにコロナ患者と関わることはないだろう」などと高を括っていましたが、ふたを開けてみれば全くそんなことはありませんでした。もちろん呼吸器内科などと比べれば治療にまで関わることはありませんが、例えば発熱やウイルス感染により全身に紅色の丘疹が出現する中毒疹や、使用した薬剤により薬疹を起こした患者さんなどを診察することは多々あります。慣れないガウンを着て、感染対策をしっかりとしている患者さんと向き合いました。こうして考えれば、皮膚は全身症状を映す鏡であり、さまざまな科の先生とも関わり合いながら診療していく必要があると実感いたしました。コロナに関わらずとも、いろんな疾患について他科との連携を大切にしつつ、日々研鑽しながら診療にあたっています。これからも一つひとつの症例と真摯に向き合いながら診療に当たっていこうと思いま



Facebook更新中!

もみじ医が広島県医師会のイベント情報をお知らせしています。

フォローして最新情報をチェックしましょう。

